

## 那賀川橋 —洪水から交通を守る—

徳島県のほぼ中央を流れる那賀川、その上に鋼トラス橋と鉄筋コンクリート橋が手を取り合う様に架かっている。那賀川橋である。国道55号の羽ノ浦佐古から阿南市南島を結ぶこの橋は、昭和3年に架けられ、同17年に継ぎ足されてから、今日まで県南の交通に寄与し続けてきた。

左岸側の鋼トラス橋は1径間が59m、有効幅員6.09mの曲弦ワーレン式鋼単純トラス4径間で、全長が235.91mである。設計は増田淳(明治40年、東大工学部卒)によるもので、当時の橋梁工学の世界的権力者アメリカのワルデ博士のもとでも学んでいた橋梁技術者である。増田氏によって設計された那賀川橋は、渡し舟や木造の暇橋しかなかった那賀川で、初の鉄の橋となった。完成当時の地元住民の喜びは大変なもので、これには那賀川での洪水災害と大きな関わりがあった。

当時、那賀川の架かる場所には旧土佐街道をなぞる府県道立江日和佐線が通っていた。立江日和佐線は徳島県那賀郡立江町から那賀川を挟んで海部郡日和佐に通じている要路である。現在は徳島県から高知県へ通じる道はいくつも通っているが、当時はこの立江日和佐線だけが唯一の幹線であった。また、大正5年には阿南鉄道が完成。古庄が終点となったことにより、那賀川を隔てた往来がますます頻繁に行われるようになった。しかし、那賀川橋完成以前の交通は、渡し舟から岡田式渡船に替わり、木造の暇橋にまで進んでからも、洪水のたびに撤去を余儀なくされ、南北への交通が途絶えていた。時には数日にもわたって南北の交通が途絶え、人々の従来、物資の輸送に不便を来すことが多かったのである。

この問題を解消したのが「永久橋」として架けられた那賀川橋であった。当時、鉄の橋やコンクリートの橋は洪水にも強いため「永久橋」と呼ばれたのである。那賀川橋の完成によって県南の交通は安定し、産業にも大きな効果をもたらした。開通式当日の徳島毎日新聞では「那賀川橋開通式記念号」も出るほど開通式は盛大に行われた。翌日の徳島毎日新聞には、その様子が次のように記載されている。



写真1 青空に映える那賀川橋

「通初に移り既報森本家三夫婦をはじめ山下知事以下の来賓に羽浦、岩脇、中ノ島各小学校児童は手に国旗を打ふりつつ渡り初を終わるや兩岸の群衆は雪崩を打つて橋上に押かけ餅投は中野島から二石（一石＝米1000合）羽ノ浦古庄から二石合計四石の餅が撒かれて群衆は物凄い渦を巻き勇援団主催の素人劇は駅前大広場で開演せられ好天气に恵まれて沿岸付近各村からの人出数万と称せられた。来賓に対しては祝宴場に於て祝宴の催しあり夜に入つては橋上に名物煙火仕掛の催しありこれまた同地未曾有の人出で盛観を呈した」

那賀川に完全な橋が架かることは、地元住民にとって長年の願いであった。その願いが叶ったこともあり、地元住民たちの喜びは非常に大きなものだったのである。

その後、昭和17年3月には那賀川改修工事により、従来の本橋の南端に接続し、橋長101m、5径間の鉄鋼コンクリートゲルバー桁橋が架設され全長336.8mとなった。さらに同45年には、上下流の両側に全幅2.4mの歩行者専用の鋼歩道橋が添架され現在の那賀川橋の姿となった。

開通してから約80年の歳月、洪水や地震にも耐え、交通量の激しさにも耐えて、一度の異常も来すことなく人々の交通を支え続けてきた那賀川橋。これからもずっと、那賀川を望みながら静かに人々の交通を支えていくことだろう。



写真2 北端：鋼トラス橋



写真3 南端：鉄筋コンクリート橋



写真4 那賀川下流部の水位情報表示板

参考文献：

- 1) 徳島毎日新聞、1928年10月22日
- 2) 羽ノ浦町誌（歴史編第一巻）、羽ノ浦町、1998年
- 3) 阿波の橋めぐり、アルス製作所創立五十周年記念誌刊行会、1999年

執筆：

徳島大学工学部建設工学科3年  
河内 貴志